

〔国際学研究フォーラム講演録 7〕

2016年10月14日（金）

Can North Korea say No? No と言える北朝鮮

講演者：Bruce CUMINGS

（シカゴ大学歴史学部教授）

報告者：Eun Ja LEE

（関西学院大学国際学部教授）

2016年10月14日（金）シカゴ大学歴史学部教授でアメリカを代表する歴史家の一人であるブルース・カミングス氏を招いて公開講演会を開催した。参加者は国際学部学生のみならず、交換留学生、教員、そして大学関係者以外の人びとなど、多様であった。

100人定員の会場にはその数をはるかに超え、立ったまま最後まで講演を聞くという熱気で包まれていた。講演後の質疑応答においても積極的な質問が続々と出て盛會に終わった。講演者のカミングス教授が講演後すぐ発したコメントは「聴衆が真剣に聞いているのが伝わり、とても嬉しい」というものであった。講演のタイトルもしかり、東アジアに住む人びとにとって重要で関心の高い講演会だったといえるだろう。

講演内容の要約は次の通りである。

北朝鮮は米国や中国そしてロシアなどから核実験やミサイル実験等に対する中止要求の圧力に対してNO!と言ってきた。多くの専門家たちは随分以前から北朝鮮はいずれ崩壊すると言ってきたが、その予測と異なり「生き延びて」こられたのは、現在もそのようなある意味で北朝鮮がNOと言いつけてきたからと言えるかもしれない。

西側、たとえば日米のメディアは、北朝鮮に対し偏った視点で報道するという共通点がある。一つの例を挙げると、「北朝鮮の脅威」論である。核開発や弾道ミサイル実験のことで取り上げ、その脅威を強調する言説が執拗に続けられている。しかし、北朝鮮の軍事予算はアメリカの0.9%、日本の12%、韓国の22%に過ぎない。北朝鮮のロケット発射に関する報道も、日本や韓国が発射する場合と報道のされ方が随分違う。核の脅威論についても北朝鮮が保有しているとされている数は8、アメリカの保有数は7650である。このように軍事力の格差は明らかであるにもかかわらず、北朝鮮は「核の脅威」として表象されている。このような偏見に基づいたメディアたとえばオピニオンリーダー的ニューズウィークなども含めそれらのあり方や背景を考えなければならない。

北朝鮮の「核の脅威」がよく強調されるが、歴史的にはアメリカが1958年に韓国に核兵器をまず持ち込み91年に撤去するまで北朝鮮、そして周辺国を威嚇していた。最近では核兵器を搭載した戦艦の再配備の問題が韓米間で浮上している。

北朝鮮は軍事大国に囲まれた、経済的にも軍事的にも「非力」な国家である。

500年以上も続いた朝鮮王国、そしてその後の日本の植民地化における天皇制、という「家父長的」国家しか経験してこなかったという視点に立つと北朝鮮という国を少しは理解できるのではないだろうか。

アメリカはミャンマーやラオスに加えてキューバーとも国交を回復した。イランとも外交レベルでは関係が続いている。北朝鮮はある意味で世界で最後に取り残された国である。このような状態は様々な問題を生み出す。1997年の四者会談で北朝鮮は休戦中の朝鮮戦争を終結し、休戦条約から平和条約締

結を求めてきたが、今、まさに平和条約を締結すべき時である。米国も日本も北朝鮮と国交を回復し、それぞれの大使館を設置し、貿易など経済交流を再開するなど外交関係を継続していく環境を創ることが重要である。

質疑応答にて

アメリカの北朝鮮政策は、1994年のクリントン政権時代には、米朝基本枠組み合意、1) 核兵器開発凍結、2) IAEA（国際原子力機関）の視察受け入れ、3) 原始炉を軽水炉にする、を成立させるなど、その関係改善に向けて柔軟な対応で米朝関係を進展させた政権であった。しかし、ブッシュ政権になり、「悪の枢軸国」と敵視し、それ以前の努力はまったく後退してしまった。結果としてこの間のアメリカが取ってきた制裁政策や先制攻撃あるいは北朝鮮は内部崩壊するだろうという予測や考え方はすべて具体的な成果を生み出すようなものとなって来なかった。北朝鮮の核開発の問題もこのような米朝関係つまり、アメリカの北朝鮮政策の変化という文脈で考えなければならない。

北朝鮮だけではなく、米国の世界戦略の基本はその軍事力をもって「報じ込める」というものである。その文脈から考えると沖縄を中心に日本に米国軍人が3万人以上もいるという現実を果たして、真の「独立国」なのかどうか考える必要があるのではないだろうか。また、アメリカと北朝鮮は朝鮮戦争後、いまだだ、平和条約を締結しておらず、休戦状態であるということを常に認識しておかなければならない。

以上が簡単な講演内容の要約である。

北朝鮮を取り巻く国際政治の現状を歴史的に客観的にそしてクリティカルな視点からなされたカミングス教授の講演は学問的に示唆に富んでいただけでなく、現実的にまた、実践的にも「東アジアの平和」を考え構築する上で貴重な内容であった。学生たちのコメント用紙からも非常に良い学びとなったというものが多かった。招請した報告者の期待を超える知的刺激のみならず学問をする意味も新たに与えられるものとなった。